

特別会員寄稿

香港中文大学 学生研修報告

早稲田大学 人間科学部
教授 加瀬 裕子

5月の新緑が美しい早稲田大学所沢キャンパスに、香港中文大学の20名の学生と2名の教授をお迎えしました。老年学について超高齢社会である日本の経験から

学びたいとの申し出があり、ところざわ倶楽部の皆さまや所沢周辺の高齢者関連の施設、所沢市役所のご協力で、1週間の研修が実現しました。紙面をお借りして、その経過についてご報告させていただきます。

事の始まりは、1月に、香港中文大学のスティーブン・ナギ教授から私にメールが届き、ソーシャルワーク（社会福祉学部と大学院）の学生のために、講義と見学をコーディネートしてくれないかという依頼があったことです。5月12日からの1週間、という期間が決まったのは3月末のことでしたが、もうその時にはホテルがとれない状態でした。最終的に、立川のホテルを予約しバスで所沢に通うことが決まりました。研修の内容をつめる段階で大きな支援となったのは、大学の事務センターの職員の方々でした。香港に長年住んだ経験のある事務職員が細かいやりとりを行い、香港中文大学で経営学修士（MBA）をとられた事務職員が大学間の契約である協定を進めてくれました。

研修は、1日目はウェルカム行事とキャンパスの案内のみでしたが、2日目は国立リハビリテーションセンター見学ならびに高齢者介護制度の講義（私の担当）と医療制度の講義（植村尚史教授）、3日目は、高齢者施設見学を「所沢ロイヤルの園」「所沢ロイヤルの丘」「所沢ロイヤル病院」にお願いしました。三ヶ島第二地域包括支援センターの社会福祉士（ソーシャルワーカー）が業務内容について説明してくださいましたが、大変わかりやすく、私が日頃行っている講義よりも上手でした。午後には、認知症の方の「思い出ブック」を作成して会話の促進を行っているボランティア集団「ピアところ2」がワークショップを実施してくださいました。香港中文大学の学生は、写真を持参してきており、自分の「思い出ブック」を作成しながら記憶を促進する方法を学びました。4日目は、高齢者の火災・災害退避行動を研究している佐野友紀教授の講義とゼミ生による発表が行われ、香港中文大学からも5人の学生が発表をしてグループに分かれて討論をしました。早稲田大学の学生は、予想以

上に英語での討論を楽しんでおり、後日、「また、このような授業をしてほしい」とリクエストが来ました。午後には、巖淵守教授によるテクノロジーの講義、金群教授によるビッグデータを応用した高齢者支援についての講義が行われました。近未来の高齢者の生活を予言する講義は、日本の科学技術の進展を象徴するもので、香港中文大学の学生はもとより、同僚の私も大いに勉強になりました。



ところざわ倶楽部 活動説明

さて、5日目のテーマは「アクティブ・エイジング」、いよいよ「ところざわ倶楽部」の定番です。「アンチエイジング」と間違えられたとの、中原総務部長の冗談に始まり、玉上広報部長の巧みな映像技術、佐藤会長のあざやかな進行

ぶりに、香港中文大学の学生から拍手が起きました。私も初めて伺ったのですが、現役時代はアジアを舞台に活躍された皆さまのトークは絶妙でした。「ところざわ倶楽部」の次は、所沢市高齢者支援課の田中主幹による発表でしたが、登壇されると立派な中国語での挨拶をなさったので、出席していた一同は予期せぬ「おもてなし」に感激をいたしました。かつて所沢市には「中国残留孤児支援センター」があり、その影響か市役所の窓口に来る中国の方が多いので、案内できる程度の中国語を勉強したとのご説明でしたが、私の所沢市役所の方に対する固いイメージは変わってしまいました。修了式を挟んで、簡単な立食パーティとなり「ところざわ倶楽部」の皆さまは香港中文大学の学生に囲まれてたくさんの質問を受けておられました。6日目は、清瀬の「ハンセン病資料館」と「巣鴨とげぬき地蔵」を見学して、7日目に無事帰国しました。

この研修が出来ましたのは、所沢市の皆さまのご支援によるものですが、関わってくださった方々のことをより深く知る機会となり、お互いの垣根が低くなったと思います。こころから御礼申し上げます。